

この人に会いたい



ナガシマ アサコさん

北本市シティプロモーション事業や広報きもとと表紙等に写真を提供いただいているフォトグラファー・ナガシマアサコさん。日常を切り取る写真を撮られるアサコさんに、写真の楽しみについて聞いてみました。

自分が愛しく思う瞬間を、残していきたい。

良いカメラじゃなくても、部屋が散らかってても良いんです。



Instagram
ナガシマアサコ
Asako Nagashima
@asacamera
@uenoheya



市役所芝生広場で講師の高山さん（株式会社WHERE・中央）から取材レクチャー

NPO法人荒川わらの会・西村さん（左）に荒川土手の田んぼを案内してもらいました

フ

オトグラファーとして家族撮影をメインに活動し、北本市内に「うえのへや写真館」を営むナガシマアサコさん。市のイベントで撮影した、雑木林の柔らかな空気感や子どもたちをとらえた写真（上）は、市のシティプロモーションのメインビジュアルとして使用されています。

「写真を撮るようになったきっかけは、中学生の時にお年玉でポラロイドカメラを買ったこと。そのころから、クラスメートのポケットとした顔とか、面白いものを撮るのが好きで。風景や友だち、猫なんかを撮り続けていました」

子どもが生まれると、自然と被写体のメインはわが子に。子どものつむじや、寝起きのほくほくした顔など、日常で見つけたちょっとした、おもしろ愛おしいと思う瞬間を写真に残すようになりました。

「人に見せるとかじゃなく、日々の生活を残している感じ。そういう写真って、後で見返すと泣けるものになるんですよ」



依頼されることが増え、写真の仕事を始めました。「撮影のときは、被写体の人に『ごめん』。その人の『ここがグツとくる！』っていうポイントを見逃さないよう、相手に『全集中』しています」

時には、しめつ面や恥ずかしがっている様子に「グツとくる」ことも。そうした「その人らしさ」を追求するのが、「うえのへや写真館」です。

「うえのへや写真館」では、白バックに子どもたちがのびのびと好きなポーズをとっている写真を撮影。お気に入りのおもちゃに囲まれてご機嫌だったり、兄弟で変顔したりして、その子のふだんの姿が垣間見えるよう。こうした日常撮影をカメラマンに依頼することのメリットは、家族のどれもカメラを持たずに済むことだとアサコさんは話します。

「個人的には、その人の一番自然な姿を撮影できるのは、一緒に生活している家族だと思っています。良いカメラかどうか

とかは、そんなに関係ないと思っていて。キラキラした見栄えのいい写真も素敵だけど、自分が生活の中で愛しく思う瞬間や大事に思うものを撮ってみてほしい。髪がぼさぼさだったり、部屋が散らかってたりしても良いんです。見返した時に何かを感じる写真を、自分のために撮ってみてはいかがでしょう」

だから、北本は面白い。

ふと感じた自然の豊かさ、直売所での何気ない会話、夕陽のお気に入りスポットや行きつけのお店。そんな北本の魅力を発信する「市民ライター育成講座」が1月30日に開催。受講者が市内で活躍する皆さんをインタビューしました。

市

民ライター育成講座とは、プロのライターさんにライティング（文章を書くこと）を学び、実際に取材を通して記事を書きまとめるもの。受講者が北本市の魅力をもっとの人に伝え、地域のことをもっと好きになる人や、北本に住んでみたいと思う人を増やすことが目的です。参加資格は「北本が好きの人」。大学生や市民リポーター、市外在住の北本ファンなど、個性豊かなメンバーがそろいました。

この日は、受講者の皆さんが市内をめぐり、自分が好きなお店や活動している人々をインタビュー。北本へ移住し米作り活動やシティプロモーション事業に関わる人や、コロナ禍を経てキッチンカーで市内に

新たな賑わいを創る人など、皆さんそれぞれの視点から、このまちの面白さについて語っていただきました。熱もこもったお話しに、インタビューする側とされる側で意気投合し、「一緒に何かやりましょう」「ぜひぜひ！」という会話が交わされることも。

今回、受講者の皆さんが執筆した記事は、北本市シティプロモーションサイト「&green」（左記QRコード）に掲載される予定です。ぜひ、お楽しみに。



市内のイベント・北本で磨かれる「北本」の魅力情報も盛りだくさん！



シェアキッチン「ケルン」にて暮らしの編集室・江澤さん（左）にインタビュー



生まれ育った北本団地への「愛」を語る飯島さん（左）

